

●木津川希少種植生調査管理業務

24 日午後 2 時から淀川河川事務所で 2019 年度木津川希少種植生調査管理業務の作業完了検査が行われました。木津川の堤防三川合流から木津川市加茂町の小谷地区までに絶滅寸前種などの植物が 40 か所で 16000 m²に生育しているところの保全環境の整備(成育調査と除草作業)を平均年 2 回以上実施してきましたが、その結果を写真やデーターにまとめて報告することになっています。里山の会は発足以来木津川における京都府レッドデータブック掲載とされている希少植物の実態を調査し、管理し保全に努めてきました。この作業が業務として河川協力団体の協力作業として発注されるようになりました。この日の作業報告で、出席者は深田理事長を始め太田さん播川さん、小川さんと山村が出席しました。検査官は以前一緒に中聖牛の取組みをした稲垣さんでした。数年間の作業なので生育結果を積み上げたデーターを添付するように要請がありました。私たちやましろ里山の会からは 40 か所年間 2 回の調査結果を写真での報告は膨大な報告書になるから改善をと要望し、双方が納得しました。

検査後 2020 年度も引き続き業務をお願いすることに決定しているのでよろしくとの挨拶がありました。

●イタセンバラの取組み

摂南大学と京都大学により木津川のワンドなどの生育調査がおこなわれ、三つのワンドにはタイリクバラタナゴの生息が確認されました。2007 年ごろにイタセンバラの生息を確認されている小川力也さんによるとその時代の環境が維持されていると判定されています。インガイの貝殻も確認されていることからかなり確率が高くイタセンバラの生育条件が整っているらしいと思われます。私達里山の会は、木津川に天然記念物のイタセンバラの復活を目指す取組みを行い始めました。イタセンバラの生育可能なタマリが発見確認できたことはこの運動の基盤が整っていることになり、自信が芽生えてきました。次の大きな課題は密漁防止のための取組みの展開へと一挙に進展したことになります。当初の計画ではワンドの水を抜いて池の調査と考えてきましたがその努力が不必要になりました。4 月 19 日城北ワンドでの調査活動に参加することにしていましたが、コロナウイルの関係で今年度の取組みは実施されないかもしれないとの様子です。また生物生育センターでの見学学習会も休園中で開催不可能ということになりました。ことごとくコロナの影響でプランが頓挫してしまいました。

●里山の応援でニホンミツバチの養蜂が開始されることに 安岡さんから要望が出され、現地視察の結果、養蜂が可能との結論に達し、北の道から通って行った先に実施 6 月末までの期間試行がされます。ニホンミツバチは大人しいもので、危害を加えない限り襲撃してくることは考えられないとのことです。スズメバチがニホンミツバチの蜜を狙ってやってくることもあるとのことです。これも危害を加えない場合安全度は確保されるとのことです。しかし子どもたちの安全を確保するために必要ならガイドの配置を条件にして許可されました。里山農園をご利用される方には少し注意をお願いしておきます。

●コロナウイルスの世界への感染拡大は東京オリンピックの延期という事になりました

また東京都では一日で 41 人の感染者の発生となり感染爆発重大極面と各自の対応が求められることになりました。集会の自粛などが強く求められることになりました。世界各国には入国拒否など鎖国政策が供されました。各方面に脅威が大きく人がりました。

●3 月の植物班の活動でアマナやイヌナズナが見事に咲きだしていました

●3 月 25 日午後から京都府がしている「絶滅のおそれのある生き物」について自然保護課の小田嶋さんにお越しいただいて条例などの説明を頂きました 里山の会から出席者 11 名が参加しました。特にヤマトサンショウウオについて里山の会が行ってきた活動を保全のための活動と整理しまとめ、地主さんなどとの合意が出来れば種の保全のための取組み助成金を受けることが可能である。ことを教えていただきました。そのほかイタセンバラやフナバラソウ、レンリソウも十分その対象になるらしいことを学びました。

●本会が打田地域に受け入れられることやホタルの集いオオムラサキの発展に尽力いただいた南五晴さんがご逝去されました。南さんにお届けしました文章を掲載します。

南五晴さんをしのんで

2 年前の冬、炭焼きのために一人で原木を窯に詰め込んでおられて、倒れられたと聞き大変驚きました。間もなく元気に回復されたとお聞きしていました。その時以来 2 回の冬を超えた原木を私達里山の会は、炭焼き窯周辺の草を切り払い 1 月 25 日に南さんが残した原木をもとに炭焼に挑戦しました。久しぶりに打田の谷間に炭焼き釜の煙がたなびき、懐かしい匂いが広がりました。南さんから幾年も何回もご指導を得た煙の色の変化を思い出しながら空気の調節時期を探りました。

今日では排煙の温度を測定できるデジタル式の温度計を用いて 360 度になって、白くなった煙を見て空気を遮断しました。7 日後に窯出しをすると 4 kg の箱が 34 箱出来上がりました。もう一釜分の原木がありましたので、その日のうちに 2 回目の炭焼を行いました。その分は今窯の中に出来上がっています。私たち里山の会は打田薪炭組合の皆さんの本格的な炭焼作業を幾度も原木の切り出しから学ばせていただきました。そのころからプロパンや灯油の化石燃料におくどさんや煙突、七輪が使われなくなり台所が変わって、木炭はすっかり売りさばき先を失いました。かろうじて木酢液が現金化できる商品として残ったのです。薪炭組合が焼いた炭は納屋に山積みになって、自家消費のみとなりやがて薪炭組合は解散となりました。

木津高校を卒業した若者が打田地域の中心となって働き盛りの年齢になって、炭窯を作り村おこしの産業とされ、現金収入の道を切り開きました。栄枯盛衰時代の流れから後継者不足が目立ち、中山間地農業の切り捨て等社会構造の大変化があって、今日の高齢者中心の地域になりました。

時は 1996 年ころ里山の会が発足して、京田辺市で自然の残っているのは甘南備山周辺や、そして普賢寺の打田地域だと知って、でかけました。下の地域では見られない植物が次から次へと発見が続きその豊かさに驚きました。このころから農協前で朝市が開かれていました。

打田の人は見たことがない他人が断りもなしに田んぼの畔を踏み荒らすとして大反発を受けました。その折り南さんや新さん前田さんたちと知り合いになり炭焼の見学や、原木の切り出しのお手伝いをさせていただき村の人達と仲良くなり里山の会を受け入れていただきました。その中で国蝶オオムラサキがこのあたりに飛んでいるとの話が出て、炭焼小屋辺当たりの榎を調べてみると幼虫の発見があって、翌年南山城地域で初めてオオムラサキの成虫が大池周囲で発見されました。近畿大学の教授で農学博士の桜谷保之先生のご指導を得て随分と普賢寺谷のすばらしさを発見させていただきました。そのうちに会員から稲作も体験したいとの声があって休耕田を借用させていただいて田植えや稲刈りを行って山本照男さんの世話をいただき米づくりなどの農業活動の幅がひろがりました。

このあたりは豊かな自然を残しているから必ず山にカスミサンショウウオが生育していると桜谷先生のご助言で山を歩いてみると、10 年前に卵を発見しました。しかし、翌年には干上がってしまい 10 年間出会うことがありませんでした。2017 年探し続けていたらカスミサンショウウオの卵囊を再発見、翌年には親を見つけられました。保健所に連絡すると京都府の「絶滅の恐れのある生き物」に指定されました。6 億年前の恐竜時代からの生き残りの生き物なのです。恐竜は滅びましたが、かろうじて現在までヤマトサンショウウオがこの打田地域で命を繋いでいるのです。貴重な植物の宝庫であり、オオムラサキや、カスミサンショウウオが生育出来ている本当にすごい地域財産であることが明らかになっています。

こうした事実を証明できたことは、炭焼き体験をさせていただいた薪炭組合の活動があったからです。その中心になって活躍されておられたお一人が南五晴さんでした。蛍の集いや里山音楽会の開催場所として広場を提供いただきました。

発足してもないころの困難な時代をご理解いただき、里山の会の今日ある姿に発展させていただいたのが南五晴さんでした。自然を大切に作る仲間の輪を大きくするスローガンをご理解いただいて私たち里山の会を受け入れていたからです。本当に感謝しております。

私達里山の会は、本日お別れに当たって、160 人会員を代表して、心からお悔やみを申し上げ、南さんのご協力に深く深く感謝しご冥福をお祈りします。

お名残り惜しいところですが、お別れの言葉といたします。

2020 年 3 月 20 日 NPO やましろ里山の会 理事長 深田三郎